

早稻田大學東洋哲學會 第四十一回大會 発表・講演要旨

魏相の災異思想

李 龍

魏相（？―前五九年）は主に前漢の宣帝期に活躍した人物である。政治家として名高い一方、經學者としては殆ど知られていない。董仲舒（武帝期）以降の災異思想の展開において、卦氣説をもとにした京房（元帝期）と、易を根本原理にしながら月令的五行説をもとにした劉歆（成帝期以降）が重要とされてきた。しかし魏相の災異理論は、易學の面では京房の卦氣説より早く、易と月令との結びつきにおいても劉歆に先駆けているように見える。本報告では魏相の考察を通じ、前漢の災異思想が從來知られているよりも早く展開していたことを明らかにしたい。

ジャイナ教議論學における議論の勝敗条件―ダルマキールティ批判の觀點から―

須藤 龍眞

議論の勝敗条件定義の變遷は、中世インド議論學史を跡づける重要な要素である。その一つの畫期として、佛教徒ダルマキールティが、ニヤーヤ學說批判を通して、新たに二種の敗北の根據（*nigrahasthāna*）を打ち立てたことが知られる。しかし、彼の議論學說がニヤーヤ學派外に與えた影響は十分に検討されていない。本發表では、兩派を批判の射程に収めるものとして、アカランカを筆頭とするジャイナ教論師の議論學說に着目する。主張の立證の成否のみを勝敗条件とし、緻密なダルマキールティ批判を展開するアカランカ等の主張の検討を通じて、ジャイナ教議論學の特徴の一端を示したい。

別理隨緣說に對する宋代天台諸師の反應―南宋天台山家派における諍論を中心に―

久保田 正宏

宋代天台の四明知禮（九六〇―一〇二八）が提唱した別理隨緣說は、華嚴教學に近接する宋代天台山外派との對決姿勢が顯著な、知禮教學を代表する教說である。しかし、知禮の法脈に連なる山家派諸師が必ずしもこの教說を肯定したわけではなく、竹庵可觀（一〇九二―一一八二）のように否定する學匠も存在した。そして、可觀による別理隨緣說の否定には、後代の山家派諸師から反論がなされ、結果的に眞如隨緣論の解釋に新たな展開が生まれたのである。本發表では、こうした展開の子細を解明し、特に、可觀の見解が後の南宋天台諸師に及ぼした影響の大きさを指摘したい。

三宅雄次郎『日本佛教史』考察―雪嶺哲學の萌芽として―

梶田 祥嗣

三宅雄次郎（雄二郎、號雪嶺、一八六〇―一九四五）『日本佛教史第一冊』（明治十九年六月）は、三宅が東京大學編輯所奉職時に編纂した實質的初作である。かつて家永三郎が指摘したように、本書の内容はタイトルと異なり、記紀の高等批評が目的であったとされる。もともと、本書の價值は記紀批判に止まらず、後に刊行された『我觀小景』（明治二十五年）や『宇宙』（明治四十二年）等において確認される方法論や哲學的議論が垣間見られる点にある。そこで本發表では本書を雪嶺哲學の萌芽的著作と位置づけ、その意義について考察を試みたい。

中世淨土宗における正統―聖罔・聖聰著作を中心に―

鈴木 英之

中世の淨土宗は三祖良忠の死後、六つに分派して各々正統を主張した。江戸期に良曉の流れを汲む白旗派がその地位を確立するが、その礎は室町期の了譽聖罔・西譽聖聰ら白旗派の碩學の活躍にあった。聖罔・聖聰は菩提流支『麒麟聖財立宗論』、法然『彌陀本願義疏』などの假託文獻を利用して新たな教學を形成・宣揚し、夢を介して權威づけを行うといった極めて中世的な手法によって自派の正統を主張した。本發表では、聖罔・聖聰著作を中心に中世淨土宗における正統創出の様相について、名越派との關連も視野に入れて論じる。

法稱の論理學における主張命題構成の基準としての聖言と世間承認

岩田 孝

論書や對論において自説を主張する者は、論證因の吟味に耐え得る主張命題の構成を意識するはずである。證明に値する主張命題を構成するための條件は何か。この問題意識のもとに、法稱（六―七世紀頃）は、主張命題の定義を確定した。その定義には「主張命題は聖言や世間承認によって否定されない」という條件も組み込まれている。しかし聖言や世間承認は、特定の學派や慣習に依存して成立するので、必ずしも妥當ではない。妥當性の疑われる聖言や世間承認は何故に疑似主張を否定する基準となるのか。聖言などの基準に關する法稱の見解を分析する。